

中国伝統演劇のおもしろさ

日下, 翠
九州大学

<https://hdl.handle.net/2324/15432>

出版情報 : 中国文学講義 : わかりやすくおもしろい, pp.76-87, 2002-05-11. 中国書店
バージョン :
権利関係 :

中国伝統演劇のおもしろさ

日下 翠

中国人と芝居

中国人は「お芝居民族」と呼ばれるほどの芝居好きです。見るのも好きですし、日常生活でも、まるで芝居のように大げさなものの言い方をしたり、身振り手振りをするときがあります。文字通り芝居気たつぷりのそのしぐさを見るたびに、この民族を理解するには芝居の知識が不可欠だな、と思ったものでした。例えば相手に対する不満・拒否を表わす「袖を払う」という動作も、芝居で実際に見て「なるほど」と納得したものでした。

芝居は中国では人々の常識や基礎教養であり、人としての振る舞いかたや、行動様式の基本となっているのです。昔、文字を知らぬ人々が九割以上を占めていた時代、それらの人々でさえ、芝居の文句の一節を歌い、歴史上の著名な人物の故事や名場面を知っていました。これらの人々を知らず知らずのうちに教育し、教養を培^{つちか}っていたのがお芝居（戯曲）だったのです。



清代の北京の芝居風景「江戸、岡田
玉山編『唐土名勝図会』より。」

戯曲の始まり

本格的な娯楽としての戯曲の発展は宋の時代に始まりますが、それ以前にも演劇の萌芽はありました。ここで大まかに中国における戯曲の発展史をまとめてみましょう。中国での戯曲の起源は、大きく言って三つに分けられます。

(1) 宮廷演劇

春秋戦国時代にはすでに、「優」「俳優」と呼ばれる人々がおり、宮廷で滑稽な仕草をし、王侯らに娯楽を提供していました。彼らは時に主君をいさめる風刺話も語りました。滑稽の隠れ蓑を着ることで「お咎めなし」で主君をいさめたのですから、なかなかの芸の力だったわけです。後世の中国芝居には必ず出てくる「道化役」のルーツといってよいかもしれません。中には『史記*』の「滑稽列伝」に出てくる優孟ゆうもうといった、後世に名を残す俳優もいたくらいですから、彼らは単なる「お笑い芸人」ではない、立派な芸術家だったといえるでしょう。

(2) 農村の祭祀演劇

農村でははるか昔から、宗教的性格の強い、神を祭り死者の靈魂を鎮める為の踊りや楽隊が行われていたと思われます。それらは次第に形をととのえ、物語性を帯びた「鎮魂劇」へと発展してゆきました。仏教と結びついた「目連劇*」などはその代表で、以前は農村でお盆の頃などに盛んに上演されました。この劇では、目連の母が僧に邪険にした罪で十八地獄を巡り、さまざまな責め苦を受ける場面を見せるのが一つの売りものになっています。人々

▽『史記』

紀元前九十年頃成立。漢代司馬遷著の歴史書。全百三十巻。「本紀」「表」「書」「世家」「列伝」の五部より成る。単に年次を追う「編年体」ではなく「紀伝体」をとるのが特徴。特に「列伝」で商人や俳優といった市井の人までも取り上げたことは大きな見識といえよう。「滑稽列伝」もそのおかげで残った貴重な資料である。

▽目連劇

釈迦の十大弟子の一人目連が、生前僧に邪険にした罪で地獄に落ちた母親を救うために地獄めぐりをする話。劇には幾つかのバリエーションがあるが、苦しむ母を助けに地獄に行き救い出すというのが基本となっている。昔の中国では盂蘭盆会の頃この劇を数日にかけて上演する習慣があった。

は仏教の教えを学びつつも、このグロテスクな「地獄めぐり」を楽しんだことでしょう。こういった祭祀演劇は死者の魂をなぐさめ、村の秩序を保つ役目を果たしながら、娯楽の少ない農村の人々にとっては、またとない楽しみとなっていたのです。

(3) 都市の演劇

都会の盛り場に現れた娯楽としての演劇は宋の時代に始まり、金元時代に大きく花開きます。特に元の雑劇は「読む戯曲」として文学扱いをされ、元雑劇は元代を代表する文学ジャンルとなりました。北方の曲を使うので、北曲ともいいますが、普通は元曲と言います。芸術としての戯曲の誕生で、中国での本格的な演劇は元曲に始まります。

中国の演劇は以上挙げた三つの起源から成るため、(1)の滑稽、(2)の鎮魂、(3)の娯楽の、三つの要素が様々な形で入り混じっているようです。

では次に都市の演劇の発展について、時代ごとに詳しく説明しましょう。

演劇の発展―宋の「戯文」から金の「院本」へ

ギリシヤ、ローマでは紀元前から演劇が栄えていたのに比べると、中国での都市の演劇の発達は意外に遅く、ようやく宋代になってからでした。

北宋の時代、大都市の盛り場*には勾欄*と呼ばれる演芸小屋があり、そこではサーカス(雑技)や、人形劇、語り物、滑稽な寸劇といった、様々な種類の出し物が演じられていました。ただ、この当時の演劇はまだコントのような簡単なもので、本格的なお芝居には程遠い

▽大都市の盛り場

これらは「瓦子・瓦舍」と名付けられた。家々の瓦が連なる場所にあるからとも、人々が集まっては散じる(瓦解する)場所であるからとも言われる。

▽勾欄

宋代の盛り場に現れた演芸の常打ち小屋のこと。『東京夢華録』には、北宋の都開封に五十幾つもの勾欄があったことが記されている。中には数千人が入れる規模のものもあったという。元代の散曲(物語詩)に、「田舎もの勾欄(芝居小屋)を知らず」という作品があるが、ここでは芝居を本当のことと思って驚く田舎ものカルチャーショックが笑いの対象となっている。

▽雑劇

宋代の「雑劇」とは、本来これらの様々な出し物を総称して言った言葉であった。「雑劇」の「雑」とは「様々な種類の」という意味であるが、それが後に演劇のことのみを指すように変化したものである。

ものでした。これを雜劇*と呼びます。

雜劇は次第に發展し、次の金代には脚本つきの演劇へと成長します。それは雜劇と區別するために院本*と呼ばれました。滑稽なやり取りを中心としたもので、次代にも受け継がれ、元雜劇の作品中に挿演されたりもしました。例えば『西廂記』のト書きで「『双關医』(二人の医者の掛け合い漫才)を演じる」というのがあります。その場面でその院本を挿演する、という意味です。

南宋時代には雜劇は南方でも發展し、浙江南部の温州から「温州雜劇」と呼ばれる演劇が生まりました。これを「戲文」又は「南戲」といいます。戲文はその後下火となりますが明代になって復興し、それ以後戲曲の中心となります。

元雜劇—庶民の芸術

元雜劇の特徴—歌劇・四折・脚色・隈取り

元雜劇は歌劇ですが、歌える俳優は只一人に限られていました。それが男役なら「正末」、女役なら「正旦」といいました。当然、正末や正旦にどの役を演じさせるかで、劇の内容や解釈が大きく異なってきます。劇作者はその点にさまざまな工夫をして劇を作り上げました。その苦勞を理解することが作品理解への大きなポイントとなります。

一劇は四折から成ります。折*とは一つの曲調を中心とした一段のことですから、四つの曲調が使われるわけです。時には楔子*という短い一段を差し挟みます。正末・正旦はそれらすべての曲をただ一人で歌うわけですから、自然と劇団の成功はその一人の俳優の力量にかかっています。その他の俳優は脚色といってそれぞれの役柄が決まっております、末(男

▽院本

金の時代になると脚本付きの本格的な演劇が生まれたが、それを宋代までの簡単な「雜劇」と區別するために「院本」と称した。院本は後世の雜劇と同じなので用語の區別がややこしくなった。滑稽をもとにした演劇で、四、五人で演じられた。『輟耕録』の「本朝院本名目」には金の院本七百編余りの題目が残っている。

▽折

戲曲用語。元雜劇は一劇四折が決まりであった。折とは一つの曲調(宮調といい、仙呂・南呂・正宮、など幾つかの種類がある)を中心とした一まとまりを指す。一幕・一場面という意味ではない。第一折には仙呂調が来るが多かった。

▽楔子

戲曲用語。一二支の短い曲を中心とする一まとまりを指す。楔子(くさび)とは本来その短い曲そのものを指す言葉であった。臨時的な性格が強く、作品が出来上がったから曲が(楔のように)挿入されることもあったようである。後に意味が変わり、小説などで「導入部」という意味で使われるようになった。

役)、旦(女役)、浄(敵役)、丑(道化役)などに分かれ、顔を色で塗り分ける隈取りもしていました。歌劇、脚色、隈取りなど現在の伝統演劇に通じるのが特徴です。中国の伝統演劇の基礎はこの時すでに出来上がっていたと言えるでしょう。

元雜劇の作家

元雜劇の代表作家として挙げられるのが関漢卿*・鄭光祖*・白樸*・馬致遠*の四人で、俗に「元の四大家」といわれます。中でもトップに挙げられるのが関漢卿ですが、大都(今の北京)の人であったということくらいしか分かっていません。それ以外の作家の多くは経歴も不明のまま、中には俳優もいたようです。また、集団創作のため作者名を記さない作品も数多く残っています。そもそもせりふの部分などは上演の度が変わるので、作品として固定したものではありません。作家も不明なら作品も元の姿はよく分からないのです。この点も正統文学とは大違いで、まさしく庶民の文学と言えるでしょう。

元雜劇の題材は多種多様で、歴史物、恋愛物、裁判劇、人情物や、さらに先に行われていた語り物の『水滸伝』、『三国志』、『西遊記』などを元にしたものも有りました。ここでは「恋愛劇」と「裁判劇」について紹介しましょう。

「恋愛劇」の影響

恋愛劇の最高傑作『西廂記』は金代に王実甫*によって書かれた名作で、後の文学にも大きな影響を与えました。ここでは小説に影響を与えた具体例として、『紅樓夢』第二十三回を紹介しましょう。

▽関漢卿
生卒年未詳。金末から元初(十三世紀)に活躍したとみられる初期の作家。当時既に名実ともに元雜劇作家のトップとみなされていたことは、『録鬼簿』巻上の首に置かれている事からも窺える。名の伝わる作品は六十数種、そのうち現存するものは十七種である。

▽鄭光祖
生没年不詳。字は徳輝。平陽(今の山西省臨汾)の人。当時の戯曲界では「鄭老先生」といわれ、高い評価を受けていた。作品は十八種の名が残っており、『王粲登楼』、『三戰呂布』などが知られている。代表作『倩女離魂』は魂が抜け出して愛する青年と結婚した女性の話で唐代伝奇を元にしている。

▽白樸
一二二六〜一三〇六。字は仁甫。太素。山西河曲人。父白華は金樞密院判官。のち金陵(今の南京)に移り住む。代表作『梧桐雨』は唐の明皇(玄宗)と楊貴妃の故事を描く。特に第四折で梧桐に降る雨に亡き貴妃を思い、嘆くシーンの歌辞は絶唱とでも言うべき格調の高さを有しており、名作の誉れがたかい。後の『長生殿』伝奇にも影響を与えた。

王実甫*
生没年未詳。金末から元初(十三世紀)に活躍したとみられる初期の作家。当時既に名実ともに元雜劇作家のトップとみなされていたことは、『録鬼簿』巻上の首に置かれている事からも窺える。名の伝わる作品は六十数種、そのうち現存するものは十七種である。

ヒロイン林黛玉*は散る花を惜しみ、桃の花びらを集めて埋め、「花塚」を作ろうと奥深い庭にやつてきます。そこで『西廂記』を読んでいた賈宝玉*と出会いました。「何を読んでいるの」と聞く黛玉に宝玉は『西廂記』を貸し与えます。そのくだりを訳してみましよう。

「林黛玉は花の道具を下におろすと本を受け取って読み出しました。最初から読んでゆくうちに読めば読むほど夢中になり、一回の食事をするほどの時間で十六幕全部を読み終わりました。詞の味わいがすばらしいと思ひ、その余韻が残っているため、本を読み終わってもうつとりとして、心の中で詞のことをつぶやいていました。宝玉は笑って「ねえ、黛玉さん、良いでしょう？」というとき、黛玉も笑って「本当にすばらしいわ」と答えました。宝玉は笑って「私は多愁多病*の身、あなたはあの傾国傾城*の美貌ですわ」といいますと黛玉は聞いて思わず耳まで真つ赤になり、たちまち顰めた眉を逆立て、双の目をかっと見開き、軟らかなほおに怒りを帯び、美しい顔に怒りを含んで宝玉を指差して言いました。「このひどい人、でたらめを言つて、よくもこんないやらしい詞や俗っぽい曲を持つてきて、こんなでたらめを言つて私を馬鹿にするなんて。私、おじ様とおば様にいつつけてやるから!」というとき、馬鹿にしてという二字でまた目を真つ赤にし、身を翻して立ち去ろうとしました。」

『西廂記』を読んだ黛玉は「恋愛」の具体像にふれ、今まで知らない感情を味わひ、それを自分の感覚として認識しました。それを宝玉に「あなたと私はこの作品の主人公たち（恋人同士）みたいですね」と俗っぽくふざけられたわけですから、黛玉が怒って手ひどく宝玉

▽馬致遠

大都の人。号を東籬という。江浙行省務官に任じられていた。「太和正音譜」の評に「馬東籬の詞は朝陽に鳴く鳳の如し」とあり、さらに「宜しく郡英の上に列すべし」とある。文辞は格調があり典雅で華麗、詞曲の巧みさは他を圧倒している。代表作「漢宮秋」は漢の元帝と王昭君の悲恋を描く。

▽王実甫

生卒年不詳。字は実甫、名を徳信といい、大都（今の北京）の人。元曲初期の作家。著作の内、現存する作品は『西廂記』始め三作品のみ。『西廂記』は後世に大きな影響を与えた。

▽紅樓夢

清代一七九一年に出版された長編白話小説。作者曹雪芹（一七一二—一七六三）、名は霽。乾隆時代の文。南京屈指の大富豪の家に生まれるが、後に家が没落、貧窮の中でこの作品を書いたという。全百二十回の内、前の八十回までが彼の作で、後の四十回は別人の作である。賈宝玉を主人公に、林黛玉を始めとする「金陵十二釵」と呼ばれる美女たちの運命を描く。中心となる話は宝玉と黛玉の悲恋である。

を罵つたのは当然です。しかし、いったん心に生まれた感情の揺れは抑えきれぬものではあ
りません。そのあと宝玉と別れ部屋に帰ろうとした黛玉は、途中ふと漏れ聞いた戯曲「牡丹
亭」の一節「汝の花の如き美貌ゆえに、流れる水の如く年月は流れゆく（人生ははかなく、
美貌はあつという間に衰えてゆく）」に心を乱され、石の上に座り込んで涙を流します。

それにしても、文学的に洗練された表現にすぐさま反応し、その感情を自分のものとして
味わうことができるというのも、長い文学的伝統がある中国ならではの幸福と言えるでしょ
う。ただそれを享受できるのは、黛玉のような一部のエリートに限られていました。しかし
戯曲の流行はそんなエリート以外の庶民にも、文学の一端を味わう機会を与えたのです。

「裁判劇」

「寶娥冤」は関漢卿の作で、元雜劇最大の悲劇といわれる傑作です。ヒロイン寶娥は姑殺
しの罪を着せられ、死刑になります。寶娥は死ぬ前に自分の無実を訴え、「もし私が無実な
ら私の血はすべて旗に飛び移り、真夏に雪が降るでしょう。そして今より三年間、楚州は早
魃に襲われるでしょう」といいました。果たして寶娥の血はすべて旗に飛び移り、真夏の六
月なのに雪が降り、さらにこの地は三年の早魃にみまわれました。そんな時、新任の長官が
現れます。この人こそ、苦勞の末科挙に通った寶娥の父天章だったのです。天章の前に寶娥
の亡霊が現れて刑死した顛末を語り、無実を晴らしてくれと泣いて頼みました。娘の非業の
死を知った天章は裁判をやり直し、おかげで真実が明らかになり犯人は処刑されました。寶
娥の恨みはようやく晴らされたのです。

「裁判劇」はこのように、裁判官が神のお告げや幽霊の訴えで事件を解決するというのが

▽林黛玉

『紅樓夢』のヒロイン。多病多愁の
美少女。天上界の絳珠草の生まれ
変わり、毎日甘露を注いでくれ
た神瑛使者に、甘露の恩を一生の
間に流す涙で返すために生まれて
きたという設定にある。感受性の
強い多感な少女。従兄弟の宝玉と
恋仲だがのちに病のために倒れ、
涙を流しつつ世を去る。

▽賈宝玉

『紅樓夢』の主人公。生まれたとき
に口に五彩の珠を含んでいた。絳
珠草に水を注いでやった神瑛使者
の生まれ変わり。大富豪の一人息
子だが勉強嫌いで女の子と遊ぶの
が大好き。女の子の身体は水で出
来ているが、男の身体は泥で出来
ていると言っただけである。林黛玉
と恋仲だが縁が無くて結ばれず、
「金玉の縁」のある薛宝釵と結婚
することになる。

▽多愁多病

『西廂記』の主人公張君瑞を指す。
驚々を思ふ余り病氣にかかり、危
篤に陥る。

▽傾国傾城

『西廂記』のヒロイン崔鶯々を指
す。未婚でありながら張君瑞と通
じる。自由恋愛のお手本、後に美
女の代名詞となるが、彼女と黛玉

ポイントで、有名な包拯ほうていも不思議な能力の持ち主ということになっています。特殊な能力を持つ神に近い裁判官が現れ、正しい裁判が行われることが一般庶民の夢だったので。いかえれば、いかに不正や不公平が多かったかという証拠になるでしょう。裁判劇には先に述べた鎮魂・滑稽・娯楽の三要素が入り混じった名作の多いのが特徴です。

明代の「伝奇」から清の地方劇へ

元雜劇は明代になりますと次第に澁刺とした生氣を失い、南方系の演劇である南戯（戯文）にとつてかわられます。これは南曲とも、また伝奇*とも呼ばれます。元雜劇と異なり、何幕でも多く連ねてゆくことができ、俳優全員が唱えるのが大きな特徴です。

元末明初にかけて高明の『琵琶記*』を始め、『荊釵記』『白兔記』『拜月亭』『殺狗記』といった名作ができました。前の時代に北曲に押されていた南戯がいつせいに息を吹き返したわけ、これを「南戯の復興」といいます。

戯曲は歌辞の部分が詩に準じるものとされたため、正統文学に格上げされました。戯曲で文名を高めることも可能だったわけで、ここが小説とは違います。伝奇の作者に文人（知識人階級）が多いのもそのためでしょう。才子佳人の恋愛劇が数多く作られました。先に挙げた『牡丹亭』（湯顯祖作）はその中の傑作の一つです。いかにも華麗で退廃の香りがし、元雜劇の素朴な健康さとはまた別の魅力があります。

以上述べた宋の戯文、金の院本、元の雜劇、明の伝奇は、中国の演劇史を貫く太い線で、このように並べること中国演劇のアウトラインが浮き彫りになります。

を比べるのは、この場合侮辱と受け取られてもやむをえないであろう。

▽寶娥冤

閩漢脚作の雜劇。ヒロイン寶娥が無実の罪で刑死するため、元雜劇最大の悲劇と言われる。寶娥の死後真夏の六月に雪が降るため、別名「六月雪」ともいわれ、後世様々な作品に改作された。京劇や地方劇にも「六月雪」のレパートリーがある。

▽伝奇

南戯・戯文の別称。明代の戯文は唐代の伝奇小説を題材にすることが多いので「伝奇」とも呼ばれた。文人（知識階級）の手になるものが多く、恋愛劇が多い。華麗で技巧的だが、元雜劇のような生氣に満ちた健康さには欠けるといわれる。

▽琵琶記

南戯の最高傑作とされる。作者高明は字を則誠と言ひ、浙江温州瑞安の人。四十歳前後で進士に及第、処州の録事に任命された。物語は、科擧を受けに行った夫妻蔡伯喈の留守を守る妻趙五娘が、舅・姑の最後を看取った後、琵琶を手に苦難をしながら夫を探す旅に出る苦難を描く。先行作品では蔡伯喈は妻

現在の中国伝統演劇のルーツは、清代中期より盛んになった「地方劇」で、その代表が京劇*です。伝統劇が今も現役で愛されているというのは、それが如何に人々の心を捕らえたかの証といつてよいでしょう。

小説への影響

戯曲文学は「読む戯曲（レーゼドラマ）」として文人たちに親しまれ、次の時代の文学―小説の繁栄に大きな影響を与えました。

例えば「白話小説」の「白話」とは「文語」に対する言葉で、話し言葉を元にした書き言葉を指します。白話の「白」とは色ではなく戯曲の台詞を表す「曰く」から来ています。戯曲の台詞を文章にすることで自然と白話が発達しました。明代の白話小説はこの基礎の上に発展したと言つてもいいでしょう。

例えば『金瓶梅*』という小説は講師が物語るといふ伝統的な語り物の体裁をとっていますが、中に多くの、登場人物が会話だけで話の筋を運んでゆく場面があります。生き生きとした会話の妙もこの作品の魅力で、小説としてはずいぶん高度なテクニクですが、これは戯曲のせりふの部分とよく似ています。作者はおそらく戯曲創作に慣れた文人だったのでしょう。登場人物が、死ぬ間際にいきなり唱いだして死後の家族の心配をするなど、奇妙な点が幾つかありますが、これも戯曲創作の癖がでたと考えたと納得がゆきます。

戯曲はまた、読み物としても流行しました。フィクションを読む楽しみを人々に広めるのにも大きな役割を果たしたのです。明末に『元曲選*』という、元雜劇百種を集めた書物が出版されました。元雜劇はその頃にはもう実際に上演される機会は殆どなくなっていました

を捨て罰を受けるが、本作品では夫婦が団円して終わる。

▽京劇

戯曲の一種。清代半ばより発達。二百年の歴史を持つ。清乾隆五十五年（一七九〇）北京に集まってきた南方系の四つの劇団が、他の地方劇団とも交流し、曲調を融合させるなどお互いに影響を受け合い、曲調や演出を工夫し変化発展させながらそのスタイルを作り上げていったもの。音曲の特徴から以前は「二黄」とも言われた。現在在中国伝統演劇を代表する演劇。

▽金瓶梅

十六世紀半ば頃完成した長編小説。全百回。『水滸伝』中の一挿話を元にしたとして物語を続けてゆく。西門慶と潘金蓮は実は生きていたとして物語を続けてゆく。西門慶が次々と富を手に入れ出世してゆく様を縦糸に、女たちの葛藤やトラブル、親戚や友人・取り巻き相手の宴会など、明代の大金持ちの日常生活が詳しく描かれる。訳に岩波文庫『金瓶梅』（小野忍・千田九一訳、岩波書店）、『金瓶梅』（小野忍・千田九一訳、『中国古典文学大系』平凡社）がある。

▽元曲選

元代の戯曲百首の選集。明万曆四十三年（一六一五）・翌四十四年刊

が、皮肉なことに読み物として出版されてヒットすることで作品が残ったのです。読み物としての戯曲が人気を得たことは、「三言二拍*」という小説集に、戯曲を小説にリライトした作品が見られることから分かります。

戯曲はフィクションを読む楽しみと白話という財産を残し、次世代の白話小説の流行という文化を生み出す基礎を築いたのでした。

芝居は「聞く」もの

中国の観客は劇を観る時、しょっちゅう隣の人とおしゃべりをしたり、菓子を食べたり、お茶を飲んだりします。たいそう行儀が悪いのですが、これには訳があります。中国では度々芝居が禁止され、芝居小屋が閉鎖されました。そんな法の目をくぐって芝居の上演が続けられました。その抜け道の一つが、飲食する店のかたすみで演じることだったのです。当然客はまともに舞台を観ようとはせず、飲んだり食べたりおしゃべりをします。そんな中で客の注意を自分に向けさせるためには必死の努力が必要でした。現在観ることのできる京劇の俳優達のみごとな演技は、そんな劣悪な環境の中で磨かれてきたものです。

中国では「芝居を観る」とはいわず「芝居を聞く」と言います。何より唱が中心だからですが、中国の伝統劇の大事な要素は唱（うた）、念（せりふ）、做（しぐさ）、打（たちまわり）の四つです。唱だけではなく、この四つすべてに優れ、なおかつ容姿の優れたものだけが主役を演じることができなのです。そんな名優と呼ばれる人の舞台では、すばらしい歌声が舞台中に響き、たくみなせりふまわしに観客は涙を流し、数秒のしぐさに十年の修業が必要という芸がおしみなく演じられます。これが中国伝統劇の魅力なのです。

行。臧懋循・字は晉叔の編『漢宮秋』以下臧氏の見識による選択と校訂を経た作品が収められる。これにより後世に元曲を伝えた臧氏の功績は大きい。

▽三言二拍

宋・元・明の白話短編集の総称。『喻世明言』『警世通言』『醒世恒言』の「三言」と『初刻拍案驚奇』『二刻拍案驚奇』の「二拍」を合わせて言う。「三言」の編纂者馮夢龍（一五七四〜一六四五）は、字は猶龍、江蘇吳興の人。福建寿寧県の知事となる。二拍一の作者凌濛初（一五八〇〜一六四四）は、字は玄房、即空觀主人と称す。浙江烏程の人。上海県尉、知県などを歴任。

唐明皇秋夜梧桐雨



元雜劇『梧桐雨』のさし絵。

玄宗が梧桐に降る雨に、今は亡き楊貴妃を思う悲痛なシーン。

